

先年平林庄五郎 弓張月拾遺をとぢわけ候事あり 御
地河太ニて巡島記五編ヲとぢわけ候事有之 いづれも
不沙汰ニいたされ候得とも はやくそのよし聞え候間
きひしく申断 とぢわけ分増潤筆うけ取 その上ニて
証文取置候事ニ御座候 とぢわけ候へハ 一冊ニ付半
冊つゝの潤筆をまし候事 是迄のとり極メにて 例も
御座候 五冊のものを八冊ニ被成候へハ 老冊半分増
潤筆御出し可被成候 作者ハ一冊つゝニて潤筆申請候
一冊廿五丁つゝ五冊ニて百廿五丁ニ成候へ共 左様ニ
きつと百廿五丁ニは書とりかね候節ハ 百廿七八丁ニ
も百三十丁ニも及ひ候得とも 五冊ニ候へハ数丁ニ拘
り不申候 然共とぢわけて冊数ふえ候得ハ 一冊のと
ちわけ半冊分まし潤筆うけ取候事 毎々とり極メニ
御座候 もし十四五丁ニてかすもの御好ミ候ハ、 已
来ハ一冊十四五丁つゝに綴り可申候 此段丁平殿へも
可申入存候得とも せわしく御座候間 いまた丁平へ
ハ不申候 これらの義いつれ御出府之上くハしく可申
候 此一義御返事はつきりといたし不申候てハ きの

一八 「天保三年」九月一六日

とくなから式輯の作ハ 当分出来かね候 とくト御勘
考可被成候 尚心事後便ニ可申達候 恐々謹言

四月廿八日

篁民

河内屋

茂兵衛様

一八 「天保三年」九月一六日

一筆致啓上候 追日秋冷之節 御揃弥御安全之由大悦
不過之珍重ニ奉存候 随而蔽屋相替事無之候 御休意
可被下候 然ハ八月廿七日御状九月七日自丁子屋相達
忝致拜見候 先便得御意申候西廂記落丁并ニ琵琶記落
丁磨滅等之義 御承知被下 当地横山町壺丁め和泉屋
金右衛門殿ニ同本御預置被成候ニ付 申遣し引替候様
御示談之趣 忝承知いたし 早速丁子屋相頼ミ 和泉
や右西廂記琵琶記共取よせ 落丁等それ〳〵改見候
処 西廂記ハ泉金の本落丁無之ニ付 則引替申候 琵琶

琵琶記ハ泉金ハ差越候本も 矢張像賛の処壺式ト式丁落
丁有之 其外磨滅之処も同様ニ付 引替不申そのまゝ
返し申候 此段御承知可被下候 其後磨滅の処ハ 此
方ニ古板の宜敷本御座候間 かりよせあらまし校訂い
たし かき入候得共 落丁は像賛故致しかたなく そ
のまゝニいたし差置候 近来新渡本とかく落丁多く困
り入候事ニ御座候

一平妖傳之事 御頼申候処 御地ニも本無之よし 然処
端本ハ有之 全八冊之処末式冊紛失ニて 六冊有之よ
し 端本ニ付代五匁 揃ひ候へハ金式分のよし 右端
本ニても宜敷候ハ、 尚又其段御返事被得御意候様
御幣上之趣 是亦忝致承知候 扱端本ハせんかたなき
ものニて あるにハおとりなきにハまし可申候得とも
式冊不足ニ候ハ、 末二十回も足り不申事ト存候 尤
五匁ニてハ高からぬ物ニ候得とも 肝心の末わかり不
申候てハ 反故同様と存候 御如才あるましく候へ共
金壺朱ニ被成可被下候 もし末式冊出候ハ、 其節御
申直段ニて可申受候 尤岡荷ニてハ脚ちんよほとかゝ

り可申候 近々御幸便有之節 無御失念船つミのつミ
合せニ被成 被遣可被下候 それとも岡荷だら便りニ
て 脚ちん共ニ五匁ニて相済候ハ、 並便だらニて
御下し可被下候 脚ちん共五匁ニて出来かね候ハ、
矢張壺朱ニ御引被下 船つミニ被成可被下候 いろ
／＼勝手かましく候へハ 恐入候得とも 近来も不相
替 年々書物多くかひ入候故 少しも下直を好ミ候事
ニ御座候 御一笑可被下候 此段注文入組申候 とく
ト御熟覧之上 御承知被下候様奉願候 外ニ少々注文
も有之候 それは末文ニ又書加へ申候間 此段ニハ致
文略候也

一紀州名所図会 飛脚並便ニて御出し被下候よし 忝致
承知候 俠客傳二集ハ八月中旬ハ取かゝり 此節式の
巻迄出来 筆工并ニさし画共壺の巻ハ不残出来 丁平
ハほりニ出し それ／＼手当被致候 二の巻も遠から
ず板下写本上り可申候 右之仕合故 紀州名所 御地
ハ被遣候迄待かね間ニ合不申候間 八月中丁平方ニて
外ハかり出し差越候間 まつそれニて急用は間ニ合申

候 尤右之本ハ 九月節句前ニ丁子やにかへし申候
此末入用之節ハ御地々着之本を相待居候処 八月廿一
日ニ御差下しの紀州名所図会 壱丁十冊 九月十三日
夕方致着 右儘ニ落手いたし候 道中ニて本もめ こと
の外 表帋いたミ候へ共 中身ハ別条無之候 三集四
集追々引用ニ入用ニ御座候間 まづ是ニて安心いた
し候 かり物ニてハせわしく 末々迄の用立かね候也
右紀州名所着いたし候間 御安慮可被下候 丁平殿十
四日夕方被參候間 右之本大坂々昨日着いたし候よし
申聞ケ置候 此義も御承知可被下候
一河内名所図会も 俠客傳引用ニ入候間 是ハ八月中丁
平殿仲ケ間よりせらせ 古本一口とりよせ候 是はか
り物ニ無之 仲ケ間々せり候本のよし 九月節句前ニ
至り いつれ末々迄入用の本ニ候間 高直ならす候ハ
ゝ かひ入レ置くれ候様 丁平ニ申談しそのまゝとめ
置申候 此段御承知可被下候
一当地八月十五日比々俄ニ冷氣ニ趣候処 前約の合巻之
作 例の板元衆々追々催促ニ候へ共 とても合巻作

いたし居候てハ 俠客傳二集暮うり出しの間ニ合かね
候ニ付 外板元ハ一同ニ申のぼし 八月中旬々俠客傳
一式ニ取かゝり 昼夜出精いたし罷在候 右愚存ハ彼
一義ニ付 当夏わさ々御出府被成候程之義故 何分
御ふやくそくニ相成候てハ不濟事と存 外板元々も前
金去秋中 或ハ当春へ被指越 受取置候て有之候へ共
右金子ハ返し可申候間 當時の事用捨いたしくれ候様
きのとくなら申断り やう々納得致させ候 ケ様
之仕合ニ御座候間 手前稿本ハ来月中ニ不殘出来可申
候 尤此上ハ板木師の遅速のミニ御座候 頼む処ハ間
月有之 来月ハいつもの九月ニ候間 かなりニ暮うり
の間ニ合可申存候 甚せわしき事ニて 中々筆紙ニ
つくしかたく候 御遠察可被下候 丁平殿も甚せり立
ぬかりなく世話いたし候様子ニ御座候 此義ハ尚追
々丁平殿々御聞被成候半ト奉存候 柳川へもきびし
く申談し 此度ハずるけなしニ画せ候つもりニとり極
メ申候 くれ々も大かたならぬ心中立ニ御座候間
左様御承知可被下候

注文

一綾足本朝水滸傳第二編の写本 江戸ニハすけなく候へとも 御地ニてハ折々出候半と存候 うつし宜キ本ニて高直ならず候ハ、一戸ほしく御座候 右之写本御座候ハ、早々御しらせ被成可被下候

一当夏御出府の節 御はなし御座候十種曲 代金貳朱ニて可入哉 落丁無之よろしき本御座候ハ、一戸船つみの節御下し可被下候

一笠翁十二楼も下直之本御座候ハ、一戸ほしく御座候一獺園ハ当夏代金壹分貳朱のよし 御はなし御座候へと
も 古本ニて壹分位の処ほしく御座候 壹分壹朱迄ニて宜キ本御座候ハ、是又ふなつみの節 被遣可被下候

一俠客傳二集五冊稿本皆出来之節 まつ差引勘定いたし夫々三集ニ取かゝり可申候 尤潤筆之事ハ 先年大坂や半蔵殿へ申談し置候間 御聞被成候て 御承知とハ奉存候へ共 為念先日丁平殿へも申談し置候 決してよけいニ貪り候事ニてハ無之候へとも 河太へ巡島記

認遣し候例も有之候間 御承知可被下候 文談いろく入組申候 とくト御熟覽被下 件々御承知可被下候 此節風邪流行ニて家内一同病人多く 其上下女ニいとま遣し 尤無人ニてこまり入申候 右ハ先便御答并ニ紀州名所図会着之御案内旁如此御座候 恐惶謹言

九月十六日

瀧澤篁民

解(花押)

河内屋

茂兵衛様

人々

尚以 前文平妖傳端本の義ハ 船荷ニても岡荷ニても右得御意候趣ニ御取斗 被遣可被下候 此外の注文ハ急キ不申候間 船つみニてもよろしく御座候

○綾足西山物語壹式笈の処 宜敷古本御座候ハ、是又奉願候也

本朝水滸傳二編写本の有無并ニ直段等 近便ニ御しらせ可被下候 早々已上